

## 12 アメリカ合衆国における高齢者のきょうだい関係 —交流頻度の分析を中心に—

安達正嗣

### 1. 分析課題

本章では、アメリカ合衆国の高齢者がもつ家族・親族関係のなかでも、きょうだい関係に焦点をあてる。ここでの主な関心は、高齢者において差異が大きいとされる年齢差（前期・後期高齢者）、性差、婚姻状態、およびきょうだい数、きょうだいとの物理的な距離によって、きょうだいとの交流頻度にどのような違いがみられるのか、である。わが国では、とくに高齢者のきょうだい関係についての調査データや論文が少ないので、今後の高齢者の家族・親族関係に関する研究を深めていくためには意義があると思われる。

#### 1.1 先行研究の検討

アメリカ合衆国において高齢者のきょうだい関係に関する研究は、1980年代後半から増大してきている。これは、近未来に高齢期をむかえるベビーブーム世代にとって、少子化の傾向のなかでは、きょうだいが高齢期における親族ネットワークの重要なサポート源の1つとして期待されていることによるものである（Scott, 1990, Brubaker, 1985, 1990）。

すでにM・B・サスマンとL・G・バーチナルによる初期の家族ネットワーク研究においても、離れて暮らす高齢者と子家族の間だけでなく、きょうだい間にも相互援助が盛んであることは明らかにされている（Sussman & Burchinal, 1962）。最近の研究例としては、M・S・モイヤーが、きょうだい自身と援助する専門家の両者によるきょうだいサポート活用の不十分さに注目している。彼によれば、家族構造の変化は、きょうだい関係が互いにサポートの唯一の源泉であることを意味しており、親しい友人との関係との相違、離れて暮らしているきょうだい関係、死によって生じた役割の変化などに関する問題を議論すべきであると指摘している。また、きょうだい関係をもつ青年層と同じように、高齢層についても研究すべきであると主張する（Moyer, 1992）。

その後の高齢者のきょうだい関係に関する研究を大別するならば、きょうだい間の相互の情緒的な機能とケア提供機能をあつかう2つの流れに分けられる。

前者の最近の調査例としては、I・A・コニディスとL・D・キャンベルが、中年期と高齢期のきょうだい間の情緒的な親密性、信頼性、接触度に対する性差、婚姻状態、親の状況の影響を調べている。大都市においてきょうだいをもつ55歳以上の528人の回答者への面接調査から、きょうだいネットワークの特徴が明らかにされているのである。その調査結果によれば、女性きょうだいをもつ人、独身者、子のいない人ほど、さらに女性ほど、きょうだい数が多いほど、地理的な距離が近いほど、年齢が若いほど、きょうだいとのより活発な交流が維持されているのである。また、情緒的な結びつきは信頼性と接触度を左右していることも明らかにしている。（Connidis & Campbell, 1995）

ケアの担い手としてのきょうだいに関する研究も、最近多くおこなわれるようになってきている。高齢者のきょうだい研究で著名なV・G・シシレリらは、きょうだい間でおこなわれるケアを分析している。その内容は、1982年から1984年にかけて実施された長期ケア全米調査のデータを用いて、高齢者におけるきょうだいケアの特徴、およびそうしたケアの開始と終了の理由を明らかにすることである。1982年のデータ分析では、きょうだいケアを受ける高齢者は比較的若く、未婚者または離婚者、子をもっていない者、小都市の居住者である傾向がみられ、1984年では、同じく比較的若く、独身主義者、農村の居住者が多

くなっているとしている。この結果として、きょうだいからの援助は、高齢者が機能的障害をもっているとき、あるいは成人子などの家族員からのサポートが不可能であるときに提供されることが明らかになっている (Cicirelli, Coward and Dwyer, 1992)。

この他の先行研究でも、最近の調査の結果によれば、高齢者の婚姻状態、性別、年齢などがきょうだい関係に大きな影響を与えていると指摘している。

## 1.2 作業仮説の設定

ここでは、婚姻状態別、性別、年齢別の差異、あるいは物理的な距離、きょうだい数の影響が大きいのではないかと考えて、さきの先行研究の結果をNSFHのデータの分析によって検証作業するために、作業仮説として次の5つを設定する。

- ① 後期高齢者（75歳以上）に比べて前期高齢者（65～74歳）では、きょうだいとの交流頻度が高くなる傾向にある。
- ② 男性に比べて女性では、きょうだいとの交流頻度が高くなる傾向にある。
- ③ 婚姻者に比べて非婚姻者（離別、死別、独身など）では、きょうだいとの交流頻度が高くなる傾向にある。
- ④ きょうだい数（生存中）が多いほど、交流の頻度が高くなる傾向にある。
- ⑤ きょうだい近くに住んでいるほど、交流頻度が高くなる傾向にある。

## 2. 分析

### 2.1 対象としたサンプル

メインサンプルから、変数M2BP01（回答者の年齢）により、まず65歳以上をフィルターにかけて選び出し、2014サンプルを抽出している。さらに、変数M71（きょうだいの有無）を用い、生存中のきょうだいをもつ高齢者1829サンプルを得ており、これが今回の分析対象としたサンプルである。したがって、サンプル数は大幅に制限されることになる。しかしながら、アメリカ合衆国の高齢者を対象とする分析としては、高齢化率12.5%（1990年時点）から考えると、サンプル不足とは言えず、ほぼ妥当な数と思われる。

### 2.2 使用した変数

メインサンプルのデータから、次の変数を使っている。

（説明変数）

M2BP01（年齢）、M2CP01（婚姻状態）、M2DP01（性別）

M71（きょうだいの有無）、M75（きょうだいの生存数）

M76A・B・C・D（きょうだいとの距離）

（非説明変数）

M77（きょうだいと直接会った頻度）

M78（きょうだいと手紙や電話を交わした頻度）

説明変数では、M2BP01（年齢）については、さきに述べたように、フィルターをかけて65歳以上の高齢者層に限定し、そのなかで65～74歳の前期高齢者（=1）と75歳以上の後期高齢者（=2）に分けて値の再割り当てをおこなったものである。M2CP01（婚姻状

態)では、婚姻中、別居、離婚、寡婦・寡夫、独身の5カテゴリーに分けられている。先行研究からみて、別居、離婚、寡婦・寡夫、独身については、きょうだいとの交流頻度に対する重要なファクターになると考えたが、それぞれのサンプル数が寡婦・寡夫を除いて極端に少なくなることから断念し、婚姻(=1)、あとの4つのカテゴリーをあわせた非婚姻(=2)でまとめて集計している。M2DP01(性別)は、男性(=1)と女性(=2)というかたちで、そのまま使っている。

また、きょうだいに関する基本項目として用いた変数は、M71(きょうだいの有無)、M75(きょうだいの生存数)、M76A・B・C・D(きょうだいとの距離)である。M71は、フィルターにかけて、きょうだいのいるサンプルを選び出すためだけに使用し、分析上の変数ではない。M75(きょうだいの生存数)は、1人から5人以上の5つのカテゴリーに分けられており、そのまま使用している。M76A・B・C・D(きょうだいとの距離)は、距離に応じてきょうだいの有無が問われる形式で4変数に分かれていたので、2マイル以内(=1)、2~25マイル(=2)、25~300マイル(=3)、300マイル以上(=4)と合成し、1つの変数としている。

非説明変数は、きょうだいとの交流頻度をはかる変数として選んだM77(きょうだいと直接会った頻度)とM78(きょうだいと手紙や電話を交わした頻度)である。いずれも、「交流なし(=1)、年に1回(=2)、年に数回(=3)、月に1~3回(=4)、週に1回(=5)、週に数回(=6)」という6カテゴリーで、最近1年間の状況をたずねている。

### 2.3 使用した説明変数・非説明変数の特徴

本章で使用した、説明変数および非説明変数の特徴について説明しておきたい。

表1は、性別、年齢別、婚姻状態別のサンプルの分布である。性別では、女性のほうが長命であることを反映して、65.3%をしめる。年齢では、65~74歳の前期高齢者が59.6%と多くなっている。婚姻状態では、非婚姻が58.4%をしめており、その内訳は別居2.2%、離婚6.1%、寡婦・寡夫45.2%、独身4.9%である。つまり、寡婦・寡夫が大多数である。

表2は、きょうだいに関する基本項目としてあげた、生存しているきょうだい数とそのきょうだいとの物理的な距離のクロス集計の結果である。生存数では、1人または2人のほうに若干偏っており、距離は、ほとんど均等に分布している。表3で、きょうだいとの交流頻度の単純集計の結果をみると、直接会った頻度では「年に数回」を中心に分布しており、手紙・電話頻度では「年に1回」と「年に数回」に、そして「週に数回」に集まる傾向にある。

表4は、属性間の関係を見るために、性別でコントロールしたクロス集計の結果である。これによると、女性に比べて男性のほうに前期高齢者が多く、また婚姻状態では対照的に、男性には婚姻が66.1%、女性には非婚姻が71.5%、それぞれで示されている。また、年齢と婚姻状態をクロス集計した表5では、非婚姻に寡婦・寡夫が多いこともあり、後期高齢者では非婚姻が71.0%と大多数となっている。一般に高齢者の特徴として明らかにされているが、婚姻状態には性と年齢がある程度、影響を与えていると考えられる。

表6は、交流頻度の変数である直接会った頻度と手紙・電話頻度をクロス集計した結果である。全く交流していない割合が29.2%と目立っており、さらにどちらも「週に数回」という割合が73.8%にのぼり、かなりはっきりと両極端に集中する傾向をみせている。手紙や電話が会えなかった分を補完する機能は、あまり明らかになっていないと言える。

## 2.4 属性・基本項目と交流頻度とのクロス集計分析

表7は、性別、年齢、婚姻状態と生存数、距離とのクロス集計の結果、この5つの説明変数と交流頻度とのクロス集計の結果をカイ二乗危険確率で示している。数値にアンダーラインを引いた部分については、表8から表13までに結果をパーセンテージで示している。

前者の結果では、0.1%以下の危険確率 ( $p=.00024$ ) で年齢と生存数とに有意差がある。表8によれば、後期高齢者についてみると、きょうだい4人あるいは5人以上が比較的少なくなっている。これは、当然ながら高齢になるほど、きょうだいの死亡する可能性が高くなるためと思われる。なお、5%以下の危険率 ( $p=.02879$ ) で、婚姻状態と距離の間に有意差があらわれているが、明確な関連は見いだせない。この結果によれば、全体的には属性と基本項目の間の関連性はうすく、分析上の大きなバイアスはないと言えるであろう。

後者の結果では、性別と手紙・電話頻度、婚姻状態と直接会った頻度および手紙・電話頻度、生存数と直接会った頻度および手紙・電話頻度、距離と直接会った頻度および手紙・電話頻度、それぞれで有意差が示されている。表9のように、男性に比べて女性のほうで、手紙・電話を交わした頻度が高い。とくに「週に数回」では、男性15.8%に対して女性28.1%と大きな差異がみられる。表10と表11では、婚姻に比べて非婚姻のほうで、きょうだいに会った頻度と手紙・電話を交わした頻度が高い傾向にある。「週に数回」をみると、会った頻度では婚姻11.1%に対して非婚姻18.0%、手紙・電話頻度では婚姻19.1%に対して非婚姻27.3%、それぞれに差異があらわれている。表12と表13では、生存するきょうだい数が多いほど、またきょうだいが近くに居住しているほど、直接会った頻度も手紙・電話頻度も高く、交流が活発になると言える。とくに距離と直接会った頻度では、「週に数回」のばあい、300マイル以上が3.6%に対して2マイル以内は43.4%と多く、逆に「交流なし」のばあい、300マイル以上が32.4%に対して2マイル以内は2.5%にすぎない。手紙・電話・頻度でも、同様の結果である。なお、年齢別では全く有意差は示されていない。

以上をまとめると、交流頻度に対しては、年齢による影響は少なく、性別と婚姻状態による影響が示され、基本項目としてあげた生存数と距離が強く作用していることになる。

## 2.5 属性をコントロールした分析

最後に、婚姻状態別、性別、年齢別の変数をコントロールした3重クロス集計を用いて、さきの結果に対する影響を探っておきたい。表14、表15、表16において影響が認められた部分にはアンダーラインを引いている。

婚姻状態別の表14では、年齢\*直接会った頻度をみると、非婚姻においてカイ二乗危険確率 ( $p=.06918$ ) が低く、生存数\*手紙・電話頻度では危険確率 ( $p=.10178$ ) が高く有意差が認められない。非婚姻には後期高齢者の割合が多く、きょうだいの生存数が減少しているためと思われる。性別の表15では、男性において生存数\*直接会った頻度の危険確率 ( $p=.09827$ ) と生存数\*手紙・電話頻度の危険確率 ( $p=.11418$ ) が高く、明確な有意差が見出せない。男性には前期高齢者が比較的多いことによる生存数の減少があるためと言える。年齢別の表16では、前期高齢者で婚姻状態\*直接会った頻度の危険確率 ( $p=.18512$ ) が、また後期高齢者で生存数\*手紙・電話頻度の危険確率 ( $p=.26959$ ) が、それぞれ高く有意差は消失したと言ってよい。前期高齢者では婚姻者が多数をしめていたこと、さきと同じく、後期高齢者ではきょうだい生存数が減少することなどが、要因と考えられる。

### 3. 結果

以上の分析から、それぞれの作業仮説の検証結果をまとめると、次のように整理される。

① 後期高齢者（75歳以上）に比べて前期高齢者（65～74歳）では、きょうだいとの交流頻度が高くなる傾向にある。

この仮説は、今回の分析では検証されていない。しかし直接的な影響力は認められないが、加齢にともなって婚姻状態や生存数が規定されており、他の変数の結果に対して間接的に影響を与えられているものと考えられる。

② 男性に比べて女性では、きょうだいとの交流頻度が高くなる傾向にある。

手紙・電話頻度では検証されているが、直接会った頻度では検証されていない。ただし、性別の結果が年齢、婚姻状態、生存数といった他の変数の集計結果に対して影響を与えていることは、明らかになっている。

③ 婚姻者に比べて非婚姻者（離別、死別、独身など）では、きょうだいとの交流頻度が高くなる傾向にある。

この仮説は、他の変数の影響を受けており、明確に検証されているわけではない。年齢では前期高齢者のばあいは婚姻が多いために、また性別では男性に婚姻、女性に非婚姻が多いために、それぞれの効果から直接会った頻度については検証できていない。

④ きょうだい数（生存中）が多いほど、交流頻度が高くなる傾向にある。

この仮説も、他の変数の影響を受けており、明確には検証されていない。生存数を規定する変数、とくに年齢の効果、それにともなった性と婚姻状態の効果があらわれている。

⑤ きょうだい近くに居住しているほど、交流頻度が高くなる傾向にある。

最も支持された仮説となっている。性別、年齢別、婚姻状態別にも左右されず、会った頻度と手紙・電話頻度のいずれでも強い関連性が示されている。ただし、近くに居住していることにより交流が活発なのか、あるいは初めから親しいきょうだいであることから近くに住んでいるのかは確認できないため、早急に判断できないところもある。

### 4. 今後の課題

残された課題としては、データ自体の把握に手間取り、分析も不十分なことから、成人子項目との関連、ケア項目との関連などを検証することができなかった点、あるいは自記式質問紙のデータの活用ができなかった点などである。さらに、検討していきたい。

ところで周知のとおり、わが国においては、成人子との関係に重きが置かれた調査研究が多く、きょうだいに関するものが極めて少ない。児童期の社会化に関しては、きょうだいを社会化のエージェントなどとして盛んに取りあげることが多いのとは対照的である。これまでは高齢期の家族に関する研究という、依然として同別居中心のために、他の親族、いわゆるヨコの血縁関係となるきょうだいには関心がはらわれてこなかったのであろう。今後、本作業で得られた知見と比較するためにも、わが国の高齢者を対象としたきょうだい関係の調査を実施したいとも考えている。そのばあいには、NSFHでは質問項目に入っていないが、きょうだいの性別や年齢順位（長女、次女など）、甥や姪などについても調査する必要があるのではないかと、データ分析の過程で気づかされた点である。

(資料)

表1. サンプルの属性 実数 (%)

性別	男性635(34.7)	女性1194(65.3)
年齢	65~74歳1090(59.6)	75歳以上739(40.4)
婚姻状態	婚姻760(41.6)	非婚姻1069(58.4)

表2. きょうだいに関する基本項目 実数 (%)

生存数	1人453(29.8)	2人338(22.1)	3人273(17.9)	4人167(10.9)	5人以上295(19.3)
距離	2マイル以内242(24.8)	2~25マイル256(26.3)	25~300マイル255(26.2)	300マイル以上222(22.8)	

表3. きょうだいとの交流頻度 実数 (%)

	交流なし	年に1回	年に数回	月に1-3回	週に1回	週に数回
直接会った頻度	216(14.1)	278(18.2)	371(24.2)	251(16.4)	185(12.1)	229(15.0)
手紙・電話頻度	138(9.0)	298(19.5)	277(18.1)	227(14.8)	227(14.8)	363(23.7)

表4. 属性間のクロス集計 (性別でコントロール) 実数 (%)

	前期高齢者	後期高齢者	婚姻	非婚姻
男性	457(64.6)	250(35.4)	420(66.1)	215(33.9)
女性	749(57.3)	558(42.7)	340(28.5)	854(71.5)
		p=.00135		p=.00000

表5. 年齢と婚姻状態とのクロス集計 実数 (%)

	婚姻	非婚姻
前期高齢者	546(50.1)	544(49.9)
後期高齢者	214(29.0)	525(71.0)
		p=.00000

表6. 直接会った頻度と手紙・電話頻度 (%)

	全くしない	年に1回	年に数回	月に1-3回	週に1回	週に数回
全く会わない	29.2	33.3	19.9	10.6	5.6	1.4
年に1回	9.0	37.1	24.5	16.5	9.7	3.2
年に数回	4.6	19.4	30.5	19.4	14.8	11.3
月に1-3回	6.4	12.4	12.0	21.9	25.5	21.9
週に1回	0.5	5.4	10.3	8.6	29.2	45.9
週に数回	7.0	4.4	1.7	6.6	6.6	73.8
						p=.00000

表7. 属性・基本項目・交流頻度のクロス集計（カイ二乗危険確率）

	生存数	距離	直接会った頻度	手紙・電話頻度
性別	.86963	.47261	.13675	<u>.00000</u>
年齢	<u>.00024</u>	.65747	.15113	.84984
婚姻状態	.13282	.02879	<u>.00857</u>	<u>.00002</u>
生存数	----	----	<u>.00000</u>	<u>.00090</u>
距離	----	----	<u>.00000</u>	<u>.00000</u>

表8. 年齢と生存数 (%)

	1人	2人	3人	4人	5人以上
前期高齢者	27.5	20.4	17.9	12.3	21.9
後期高齢者	33.5	25.2	17.8	8.6	14.8
全体	29.7	22.1	17.9	10.9	19.3

表9. 性別と手紙・電話頻度 (%)

	交流なし	年に1回	年に数回	月に1-3回	週に1回	週に数回
男性	11.8	24.4	20.4	14.2	13.3	15.8
女性	7.4	16.7	16.8	15.2	15.7	28.1
全体	9.0	19.5	18.1	14.8	14.8	23.7

表10. 婚姻状態と直接会った頻度 (%)

	交流なし	年に1回	年に数回	月に1-3回	週に1回	週に数回
婚姻	13.8	19.1	26.1	17.7	12.2	11.1
非婚姻	14.4	17.4	22.8	15.4	12.0	18.0
全体	14.1	18.2	24.2	16.4	12.1	15.0

表11. 婚姻状態と手紙・電話頻度 (%)

	交流なし	年に1回	年に数回	月に1-3回	週に1回	週に数回
婚姻	8.2	22.8	21.8	14.2	13.8	19.1
非婚姻	9.7	16.8	15.2	15.3	15.7	27.3
全体	9.0	19.5	18.1	14.8	14.8	23.7

表12. 生存数・距離と直接会った頻度 (%)

	交流なし	年に1回	年に数回	月に1-3回	週に1回	週に数回
1人	21.9	19.6	22.3	13.9	8.2	14.1
2人	16.0	20.4	26.6	12.4	10.9	13.6
3人	11.4	16.8	26.4	20.1	12.5	12.8
4人	7.2	18.0	25.1	21.6	12.6	15.6
5人以上	5.4	14.9	22.4	18.6	19.0	19.7
全体	13.9	18.2	24.3	16.4	12.1	15.0

---

2マイル以内	2.5	5.0	12.8	15.7	20.7	43.4
2~25マイル	4.3	9.4	24.2	27.0	20.7	14.5
25~300マイル	11.8	18.8	35.7	17.6	7.1	9.0
300マイル以上	32.4	31.1	22.1	7.2	3.6	3.6
全体	12.2	15.7	23.9	17.2	13.2	17.7

表13. 生存数・距離と手紙・電話頻度 (%)

	交流なし	年に1回	年に数回	月に1-3回	週に1回	週に数回
1人	13.5	22.3	17.2	13.9	12.1	21.0
2人	9.2	22.8	19.5	14.2	12.7	21.6
3人	7.3	16.5	18.3	15.0	19.0	23.8
4人	7.2	15.6	17.4	17.4	16.8	25.7
5人以上	3.4	16.6	18.3	15.6	16.6	29.5
全体	8.8	19.5	18.2	14.9	14.9	23.8

---

2マイル以内	9.9	9.9	7.9	9.9	15.7	46.7
2~25マイル	8.2	10.2	11.3	17.6	18.8	34.0
25~300マイル	9.4	26.3	20.4	17.6	11.8	14.5
300マイル以上	10.4	28.4	24.8	13.5	11.7	11.3
全体	9.4	18.5	15.9	14.8	14.6	26.9

表14. 婚姻状態をコントロールしたクロス集計 (カイ二乗危険確率)

	婚姻	非婚姻
性別*直接会った頻度	p=.68575	.79257
性別*手紙・電話頻度	.00059	.00031
年齢*直接会った頻度	.74967	<u>.06918</u>
年齢*手紙・電話頻度	.65266	.25157
生存数*直接会った頻度	.00003	.00020
生存数*手紙・電話頻度	.01201	<u>.10178</u>
距離*直接会った頻度	.00000	.00000
距離*手紙・電話頻度	.00000	.00000



表15. 性別をコントロールしたクロス集計 (カイ二乗危険確率)

	男 性	女 性
婚姻状態*直接会った頻度	p=.45503	.16186
婚姻状態*手紙・電話頻度	.02070	.01120
年 齢*直接会った頻度	.77977	.21186
年 齢*手紙・電話頻度	.97695	.71833
生 存 数*直接会った頻度	<u>.09527</u>	.00000
生 存 数*手紙・電話頻度	<u>.11418</u>	.01426
距 離*直接会った頻度	.00000	.00000
距 離*手紙・電話頻度	.00000	.00000

表16. 年齢別をコントロールしたクロス集計 (カイ二乗危険確率)

	前期高齢者	後期高齢者
婚姻状態*直接会った頻度	p= <u>.18512</u>	.02509
婚姻状態*手紙・電話頻度	.00012	.04938
性 別*直接会った頻度	.19253	.76537
性 別*手紙・電話頻度	.00001	.01193
生 存 数*直接会った頻度	.00002	.00801
生 存 数*手紙・電話頻度	.00780	<u>.26959</u>
距 離*直接会った頻度	.00000	.00000
距 離*手紙・電話頻度	.00000	.00000

(参考文献)

- Brubaker, T.H., 1985, *Later Life Families*, Sage Publications.
- Brubaker, T.H., 1990, "Families in later life: A burgeoning research area," *Journal of Marriage and Family*, 52, pp.959-981.
- Cicirelli, V.G., Coward, R.T. and Dwyer, J.W., 1992, "Siblings as Caregivers for Impaired Elders," *Research on Aging*, 14, pp.331-350.
- Connidis, I.A. and Campbell, L.D., 1995, "Closeness, Confiding, and Contact among Siblings in Middle and Late Adulthood," *Journal of Family Issues*, 16, pp.722-745.
- Moyer, M.S., 1992, "Sibling Relationships among Older Adults," *Generations*, 16, pp.55-58.
- Scott, J.P., "Sibling Interaction in Later Life," in Brubaker, T.H. (ed.), 1990b, *Family Relationship in Later Life* (2nd ed.), Sage Publications, pp.86-99.
- Sussman, M.B. and Burchinal, L., 1962, "Kin Family Network: Unheralded Structure in Current Conceptualizations of Family Functioning," *Marriage and Family Living*, 24, pp.231-240.

④

重点領域研究「ミクロ統計データ」・公募研究（課題番号08209118）

「家族構造の国際比較のための基礎的研究－公共利用ミクロデータの作成と活用－」

平成8年度研究成果報告書（1）

## 公共利用ミクロデータの活用による 家族構造の国際比較研究

－米国NSFH調査データの利用を通して－

1997年3月

研究代表者 石原邦雄  
（東京都立大学）